

■対談



これからの大阪・関西 共に育むひととまち

尾崎 裕・大阪商工会議所会頭 × 池内 啓三・理事長

2020年代が幕を開けた。今夏の東京オリンピック・パラリンピックを皮切りに、来年は大阪でワールドマスターズゲームズ、そして2025年には大阪・関西万博が開催されるなど、大阪・関西は、更なる発展のきっかけとなる世界的なビッグイベントが目白押しである。今回は、このチャンスを生かし、いかに持続可能で新しい発展をするかをテーマに、関西の経済界をリードする大阪商工会議所の尾崎裕会頭と池内啓三理事長が語り合った。



万博誘致実現に向けた決起集会で決意表明を行った尾崎裕会頭(2017年)

◆大阪商工会議所と関西大学

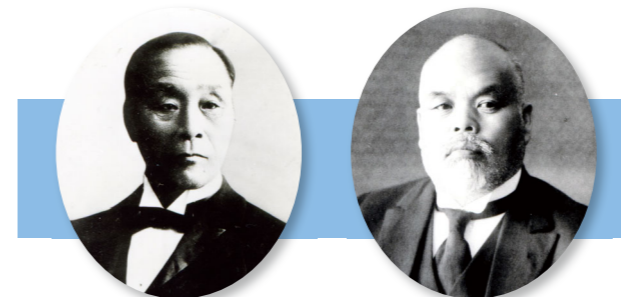
池内 尾崎会頭には理事として、本学の運営面でもいろいろとお力添えをいただいております。私が初めてご挨拶にお伺いした際に、「実は父が関大で教壇に立っていました」とお聞きし、本当に驚きました。お父様が社会学部の尾崎康夫先生であられたとは。

尾崎 世の中は狭いものですね。実は関大とのご縁はもう一つありまして、関大が蔵書を継承されている泊園書院ですが、うちの曾祖父がその門人でした。

池内 それは初めてお聞きしました。更にそのようなご縁があったのですか。

尾崎 関西にいて、いろいろところで思わぬ関わり合いがあるもので、共に関西のために何かに取り組むことは意義深いと感じます。

池内 大阪商工会議所と関大のご縁でいえば、本学創立者の一人である土居通夫氏(1837~1917)並びに本学第11代学長で総理事の山岡順太郎氏(1866~1928)は共に大阪商工会議所の会頭を務めておられます。土居氏は同じく本学創立者の一人である児島惟謙氏と竹馬の友で、その児島氏が土居氏を関大と結びつけたのですから、大阪商工会議所なしでは、本学の創立はなかったと言っても過言ではないでしょう。



関西大学創立者 土居通夫

第11代学長・総理事 山岡順太郎

尾崎 いや、私たちの方こそ、関大出身の職員の力がなければ、この大阪商工会議所を運営してこられなかったと思います。土居氏、山岡氏が礎を築かれた関大から、私共へ人材を輩出いただけてきたということは非常に感慨深いです。

◆多様な人づくりの伝統と更なる挑戦の気概を

池内 本学の理事として、3年間関大をご覧になって、関大について気付かれたところをお聞かせください。

尾崎 関大は130年以上の歴史があります。その歴史で培われた伝統はものすごく大事で、それが原動力の一つではあるのですが、世の中が急激に大きく変化していく中で、あまりにその伝統に引きずられると、ダイナミックに新しいことを取り入れる気概が薄くなるのではないかと懸念します。土居氏や山岡氏はまさにゼロから関大を創立した。そういう気概でいろいろなことに挑戦すると良いと思います。

池内 やはり本学のことをよくご覧になっておられますね。私は関大を卒業後すぐに事務職員になりましたので、学生時代から含

めると60年近くずっと関大にいたことになります。だから、今ご指摘の部分はあられるかもしれないと感じます。

尾崎 関西大学と言えば、学是「学の実化」にもあるように、実学に強いですね。社会のさまざまな領域で役に立つことを学ぶことが学是であることはすごく重要だと思います。私は2つの学びがあると思います。1つは直接的に役に立つ学びです。例えば、AI、プログラミング、外国語、会計や法律等のスキルや知識を身に付けることですね。これは関大が特に得意とするところだと思います。もう1つは、哲学や歴史等、一見社会に出て何の役に立つのかと言われそうですが、人間の本質のようなことに触れる学びです。

池内 そのような学びは、人間のベースになる部分を形成することにつながりますね。

尾崎 即戦力となる技術や知識を身に付けて、社会で活躍することは大切です。しかしながら、すぐに目立った活躍はできなくても、いろいろな側面から物事をじっくりと考察することができ、5年10年で組織に欠かせない存在になるような人材も、ぜひ大学で育ててほしい。学生に両方の学びの機会を提供してほしい。

池内 本学は13学部あり、毎年約6,700人が入学してきます。多様な能力を持つ学生が、講義や実験だけではなく、スポーツや課外活動を通じて、人間性や社会性を磨き、卒業していきます。社会のさまざまな分野で活躍する本学OB・OGを見ておきますと、本学での学生生活が社会に出た時に非常にプラスになっている。それは関大の1つの強みかなと感じています。

尾崎 教員、事務職員、大学院生、そして園児、児童、生徒も加わると、本当にすごい人数がキャンパスに集まっていますね。その皆さんの日々の交流や活動は大きなパワーになると思います。もちろん、衝突もあるだろうと思います。でも、みんなが同じことを考えていたら、それは多様性とは言えませんね。ガンガン交流して衝突して、学部間でももっと切磋琢磨してもいいのではないのでしょうか。

池内 今はもう学部間にとどまらず、大学間でも交流する時代。もっと既存の枠を飛び越えていかなければと思っています。

◆学びたい社会人のニーズに応える大学教育

尾崎 多様性という点では、社会に出てからもう一度大学で学びたいという学生の存在も重要ではないでしょうか。アメリカでは、学部卒業後すぐ大学院へ進学するのではなく、学部卒業後に数年働いて、学費等を貯めてから大学院に進学する人は珍しい話ではありません。それも、学部の専門とは違う研究科や研究室に進むことも一般的です。そのように、日本でも大学と社会を行ったり来たりする人が増えてくると、面白くなると思います。

池内 おっしゃる通りですね。既にそのような時代が来ているのは間違いない。22、3歳で就職して、1つの会社で定年まで勤め上げて、あとはセカンドライフを送る時代はもう終わったということははっきりしているわけですから。

尾崎 大学でも、学術研究一筋の教員から企業で活躍して実務に強い教員まで、多様な教員から学べるとういいますね。懐の大きい関大だからこそ、学ぶことを切に希望している社会人に応え、新しいことに挑戦していただけると嬉しいですね。

■対談

池内 本学梅田キャンパスが大阪の都心にあり、交通アクセスも良いため、私はそこを社会人教育の聖地にしたいという思いがあります。また、AIが普及し、発展する中で、AI人材をどう育てるか。これは次世代を創造していく学生のためにも、社会人のためにも、大学が取り組まなければならない課題の1つになっています。

尾崎 大学には、例えば、AIにこんなインプットをしたら、こんなアウトプットが得られるというシステムを設計する研究者は恐らくおられると思います。でも、私たち経営者の立場から言うと、そこまで技術的に精通していなくても、業務上のこの課題はAIに馴染むかどうかを判断できる知識を持っている人が欲しい。大学ではAIを作る側と使う側、その両方の立場で学ぶことができるような環境を整えていただけたらと期待しています。



●AIビジネス創出アイデアコンテスト
AIを活用した新ビジネスの創出をめざし、優秀な提案を表彰しその事業化を支援するコンテストを実施。写真は第2回コンテストの受賞者と共に(2019年)
(主催：大阪商工会議所/国立研究開発法人 産業技術総合研究所 人工知能研究センター 人工知能技術コンソーシアム)

◆学生が街を元気にする

池内 昨年は日本各地でラグビーワールドカップが盛り上がりました。今年は東京オリンピック・パラリンピック、来年はワールドマスターズゲームズと続き、そして2025年には大阪・関西万博が開催されます。このような時期に大阪にいられるというチャンスを、学生たちにはうまく掴んでほしい。そのために、大学としても学生がかかわれる場をさまざまな形で整えていかなければならないと思っています。

尾崎 場を与えることも大事なことです。学生たちがもっと勝手に自分たちで作り上げるようになれるのもっといいですね。私は大学が学生たちをあおってほしいと考えています。「君たちの万博やで」と。「未来社会の実験場」をコンセプトに「こんな未来にしたい」と主張する万博ですから、学生たちには実現する可能性は度外視して、ぜひ「こんなことやりたい」という声を上げてほしい。私たちもアイデアを募集する機会を作っていきたいと思いますが、各大学でもぜひご検討いただきたい。もし、良いアイデアが出てきたら、関係組織が協力して、万博開催前に試行してみることもできると思います。

万博の会期中、関連する仕事やアルバイトがたくさん出てくるのが予想されます。世界中からたくさんの方が押し寄せるインターナショナルな場ですから、留学生にもお力添えをいただくと嬉しいですね。関大にはどのぐらいの留学生がいますか。

池内 現在、学部・大学院合計で1,100人余の留学生が学んでいて、年々増えています。

尾崎 日本で学び、日本人と交流することで、日本に対する理解が進む。インバウンド観光もそうですが、将来、国同士の交流には絶対にプラスになると思います。そのような意味でも、留学生

は大切にさせていただきたいと希望します。

大阪商工会議所は、大阪・関西が「日本の成長を牽引する、アジアとのビジネス交流はもちろん、人的、知的交流を促進させ、日本中のみならず世界中、特にアジアの人々が大阪に集まり、新しいものやビジネスを生み出す。大阪をそんな活気ある街にしたいと考えています。

池内 本学の南千里国際学生寮では、7人につき1人の本学学生がレジデント・アシスタントとして留学生たちと共に生活しています。理想的な制度ですが、果たして本学の学生たちが手を挙げてくれるのか、当初はとても心配していました。でも、海外留学から帰国した学生たちが、留学先でお世話になったお返しだと言って、希望する学生が絶えず、レジデント・アシスタントは順番待ちの状態になっています。このような交流の積み重ねが、だんだん大きな力になっていくのを感じます。

尾崎 理事長が心配するほど、学生は消極的でも保守的でもありません。チャンスを与えたら、結構やるものです。だから、どんどんやらせてください。

池内 そうですね。しかし、かつて、当時の規制により、大都市圏では教室の新設や増設が制限され、大学が郊外に出でいかざるを得なかった時期があり、大阪市内に大学が少ないことが残念ですね。

尾崎 また少しずつ回帰してもらえたらいいと思います。学生が騒がないような街はアカンのですよ(笑)。例えば、学生がアルバイトするのだって、先生や友だちと飲んで語り合ったりするのだって、繁華街に近い方がいい。また、街には大学の教室では学べないことや経験できないことがたくさんあるので、街と大学は近い方がいいのです。学生も無茶をするばかりではないですから、街と大学は共存共栄ができると思います。



▲中国・深圳を訪問し、プログラミング教育ロボットを開発するベンチャー企業「メイクブロック」王連軍 創業者・CEOと面談する尾崎会頭(2018年)

◆本音の大阪だからできる産学連携

池内 本学に期待していることをお聞かせいただけますか？
尾崎 関西大学をはじめ、当時の大阪の経済人が大学の創立に一所懸命だったのは、街に大学があって、そこに元気な学生がいることで、経済も発展すると考えていたからだと思います。その時代から続く、大阪の経済界と大学のつながりを、引き続き維持し、発展させていけたらと思います。

産学連携もどんどん進めていかなければいけない。大阪は建前や形式よりも、「ほんで、ほんまはなんぼやねん」と本当の価値を見出そうとする人が多い。だから、大学での研究に対しても、その研究に価値を見出せば、誠意をもって支援する。そんな温かさのあるところだと思います。

関西大学には、これからも社会に有用な人材を育成してほしいですね。実際に、これまでそのような人材を多く輩出され、あらゆる分野で卒業生が活躍されている。そんな先輩諸氏とも連携し、多様な能力を持った人材を拡大再生産していただけたらと期待しています。そして、誰も挑戦したことのない新しい領域にも積極的に取り組んでいただきたい。

池内 オール関大で取り組んでいく所存です。本日はありがとうございました。

学生が騒がないような街はアカンのですよ(笑)。例えば、学生がアルバイトするのだって、先生や友だちと飲んで語り合ったりするのだって、繁華街に近い方がいい。

尾崎 裕 (おさき ひろし)
大阪商工会議所会頭。1950年兵庫県生まれ。72年東京大学工学部卒。同年、大阪瓦斯入社。2005年常務取締役。08年代表取締役社長。15年より代表取締役会長。同年、現職就任。25年日本国際博覧会協会副会長、日本ガス協会会長(2013～16年)、アジア太平洋観光交流センター会長などの要職も歴任。



2025年には大阪・関西万博が開催されます。このような時期に大阪にいられるというチャンスを、学生たちにはうまく掴んでほしい。

池内 啓三 (いけうち けいぞう)
学校法人関西大学理事長。1943年旧満州(中国東北部)生まれ。46年日本に引き揚げ、大阪府に住む。65年関西大学文学部新聞学科を卒業し、学校法人関西大学に奉職。92年評議員。96年総務局長。2000年理事。法人本部長、常務理事、関西大学幼稚園長を経て、08年専務理事、12年より現職。